

第5学年国語科の実践

1 単元名

「思いが伝わるような文を書こう」
 教材「どんなとき、だれに」 光村図書
 宇宙人からのメッセージ ～言葉や表現のちがいをから～
 教材「お願いのお手紙、お礼のお手紙」 光村図書

2 単元目標

自分の思いを十分に相手に伝えることができるように、適切な言葉遣いや表現で文章を書くことができる。

関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	言語
目的や場に応じて言葉遣いが変わることに関心を持つことができる。	目的や場面に際して言葉遣いがどのように変わるかを考えながら話すことができる。	目的や場面に際して言葉遣いで文を書くことができる。	学習を通して、語感や言葉の使い方に関心を持つことができる。

4 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」

手立て：子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

①単元について

本単元は、新学習指導要領

「B書くこと」(2) 内容オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること
 カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言しあうこと

による。

この単元を選んだ理由は、ある児童の日記を紹介した時に、聞いていた児童から「なるほどねえ・・・」や「そんな風にかけないよ・・・」と言った声やつぶやきが聞こえてくるものがあつたからである。これは、児童がより豊かな文章を書きたいと思っていることの表れではないかと考えている。正直、毎日書いている日記に、細かい指導ができないのが現状である。じっくりと「書く」学習をしたいと思っていた矢先、総合学習の活動の一つとして、10月にある会社社長に講話をしていただくためのお手紙が必要ではないかということになった。社長の来校を願う気持ちを相手に十分に伝わるように文章に表さなければならない、という現実が児童の目の前に迫ってきた。しかし、改まった手紙を書いた経験のある児童は少なく、たくさんの不安を持っているのが現状であった。総合が主となる教科ではあるが、この活動は、国語の分野にふさわしく、児童にとって『思いを伝える文章を書きたい』という切実な課題になっていくことと思う。文末表現、ていねいな言葉、尊敬語などの言葉遣いに加え、時候の挨拶に至るところまで、本単元を通して学んでいくことができる。学習のはじめは、社長にお手紙を書くという学習の最終目標を確認した後、そのための学習として、この教科書の＜資料＞にあるピロロ星人からの文章を学習していくことを児童と確認していく。

本単元で扱う教材「宇宙人からのメッセージ」は、ピロロ星人が地球人（日本の全国民）にメッセージを送る際、どのような表記がよいだろうかということを、唯一の地球人の友達“さとり”に相談して仕上げていく、という内容である。星人は、さとりと合計4回相談をしてくる。1回目（メッセージ①）は、覚えた関西弁の話し言葉をそのまま使っている文章である。2回目（メッセージ②）は、方言での文章をやめ、共通語にし、文末を常体の形で書いた文章である。3回目（メッセージ③）は、2回目の文章の文末を敬体にした文章である。そして、最後の4回目（メッセージ④）は、メッセージ③の文章をさらに尊敬語や謙譲語、丁寧な言葉に変えて構成した文章になっている。そして、内容の確認として、メッセージ②と同じタイプの問題が用意されており、復習できるようになっている。

さらに、時候の挨拶文を入れた“手紙”の書き方については、教材「お願いの手紙、お礼の手紙」を学習していくことにする。気持ちを十分に伝える一手段として、手紙には時候の挨拶文や結びの言葉などがあることを学んでいく。単元に不可欠な内容でもあるため、丁寧な言葉や書く順序などの知識も増やすことができる。

②単元の学習過程と児童の見取りについて

本単元の目標は、“自分たちの思いが伝わるように丁寧な手紙を書きたい”である。「書き出しは、どのように書いたらよいのだろう。」「失礼な言葉を使ってしまったらどうしよう。」「自分の書いた内容が、きちんと相手に伝わるだろうか。」などの不安を感じている。そこで、第1次では、教材「宇宙人からのメッセージ」を用いて【言葉遣い】について学習していくことにする。

メッセージ①の学習では、ふだんから共通語で会話をしている児童にとって、違和感を覚えたり、内容が今ひとつ理解できなかったりするため、方言での書き方は、伝わりにくいと理解していくであろう。続くメッセージ②と③では、文末の表現の仕方（常体と敬体）である。児童は、文末表現には、敬体と常体の2種類があることを以前学習している。今回の場合には、どちらの方が相手に伝える文章としてよいのかを考えることになる。改めて、文末表現の違いについて理解し、場に応じて使い分けていく必要性を感じるであろう。

メッセージ③の文章でも十分内容は伝わる。丁寧な言い方や文末の表現の仕方などが理解でき、児童は、

学習の始めに持っていた文章表現の不安が少し解消されてきていると思う。しかし、相手に対しての表現をもっと丁寧な言葉（伺うなどの謙譲語）にした方がいいことに気づく児童が数名いると思われる。それを機に、メッセージ④を提示することにする。

メッセージ④は、相手の行動に対して〈お〉を付けたり（例：お会いする）、文末をもっと丁寧にしたり（例：おります）になっている文章である。児童の中には、聞き慣れない言葉がたくさん出てくると感じるかもしれない。しかし、丁寧な言葉の使い方を学びたいという児童の願いを叶えることにもつながるため、知識や語彙を増やす場として紹介し、理解を得て欲しいと思う。

ここまでの段階で、児童は手紙を書く不安がだいぶ和らいだと思う。そこで、教材文に出てくる問題文に挑戦してみることにする。学んだ知識を生かそうという意欲を見せられるので、まずは、一人で取り組んでみることにするが、書いてみた文章は、本当に丁寧で、相手に伝わるようなものだろうか、という不安はまだ残るであろう。さらに友達はどうのような文を書いただろうか、というような感想も持つであろう。そこで、再構築していくために、グループの友達と読み比べをすることにする。その際、ワークシートを用意して、大事な点を落とさないための規準を明らかにさせながら行わせていきたい。そうすることで、足りなかった部分や使い方の誤りを確認することになり、再構築していくことができるであろう。この活動を本研究である「ひびき合い」の場面としたい。さらに、他のグループでまとめたものもどのような文章になっているか、興味を持つと思われる。グループは、全部で8班あるため、全て読み比べることは大変だと思うので、どこかの班のものを土台にして、より表現豊かな文になるように意見交換をさせ、文章を作り上げていきたい。

第2次は、いよいよ手紙を書く学習である。第1次で学習したことを生かし、社長という立場にある方へ失礼がないよう、またぜひ自分たちの知らない話をして欲しいという願いを手紙にしてみるところである。これまで、教材「宇宙人からのメッセージ」では、メッセージという文の内容で学習してきたが、今回は手紙となるため、少し応用した力が必要となる。例えば、メッセージの始めは自己紹介からであるが、手紙となると時候のあいさつから入るのが一般的である。児童にとっては、そのような学習をしてきていないため、書くことができないであろう。しかし、学校から発行されている保護者向けのお便りや生活経験などから、挨拶文を目にしている児童もいると思われる。そのことを聞くと、おそらく全く知らなかった児童は、正式な手紙の書き方や時候のあいさつをどのように書いたらよいか等、を知りたいと思うであろう。そこで、教材「お願いのお手紙、お礼のお手紙」を用いる。この教材は、今の児童にとって必要な内容となるであろう。

活動としては、第1次と同じスタイルで、個人の考え→グループで推敲→学級で推敲という順序で学習を進めていきたい。まず、個々で思いを込めて手紙を書き、その後にグループ4人で比較しながら、一つにまとめていく。今回は、前回と違い、実際に人の手に渡って読まれるのであるから、児童は前回よりさらに言葉を選びながら手紙を書いていくであろう。お送りする手紙は、クラスで一つに絞って出すことになった。本来ならば、全児童の書いたものをお渡しするのが望ましいと思うが、31通になってしまう。そこで、話し合ったところ、クラスみんなで知恵を絞り、思いを一つにして手紙を送った方がよいのではないかという結果になった。そうであるからには、言葉一つ一つ真剣に吟味して、最もよいとする手紙にしていきたい。一つにまとめていく学習の場面では、グループでまとめたときの文章を生かし、たくさんの意見交換をして、思いが伝わる文章とは、どのような文章なのかを学んで欲しい。

③ひびき合いについて

「書く」という学習は、一人で考えながら行っていく学習のため、私は“ひびき合い”という学習につながらないのではないかと、と今までは考えていたが、学習指導要領に『表現の効果を確認したり更に工夫したりするためには、読み手の立場から文章を客観的に評価することが必要なり、自己評価に加えて相互評価を積極的に位置づけることが求められる』・『書く目的や意図に応じた構成や表現になっているかどうかについて具体的に助言し合うことが求められる』とある。上記の②に書いたように、本学習での“ひびき合い”の場面は、個人の文章を小グループでまとめるときやクラスでまとめるときである。個別に書いた文章をもとに、少人数や全体で読み比べることを通して、よい表現方法をめざしていくところである。友達の力を借り、自信を持って思いを伝える文章を書くことができることを目標としたい。

4 児童の思考の流れと指導計画（全8時間）

	児童の思考の流れ	指導計画
第1次 ④	「社長になられているSさんのお父さんにいろいろと話を聞きたいな。そのために依頼のお手紙を書かなくちゃ。」 ↓ 「うまく文章を書くことができるかな？」 「気持ちが伝わるような上手な文を書きたい！」 「教科書の文で勉強しておこう。」 ↓ 「方言の文は分かりにくいな。」 ↓	目標：思いのこもった文章を書くことができるよう、教科書の資料を使用して、丁寧な文章を書くための言葉遣いを学ぶ。

	「標準語に直してみよう。」 ↓ 「文末の違いでだいぶ雰囲気が変わるな。」 ↓ 「もっと丁寧な言い方ができるのかな。」 ↓	活動：①・書くときに不安に思っていることを挙げておき、活動の内容を明らかにする。 ・方言と共通語の使い分けについて考える。 ・改まった表現の用い方について考える。 ①メッセージ3と4を比較し、内容を伝えるだけでなく、気持ちやものの考えも伝えていくことの大事さについて考える。 ①・個人で考えて書いてみる。 ・グループ（4人）でよりよい表現方法になるように考える。 ①あるグループで考えた文章と自分たちのグループと比較し、さらによりよい表現方法をにるように考える。
活用するⅠ	「教科書の問題文に挑戦してみよう。」 ↓ 「グループのみんなはどのように書いているのかな？」 ↓ 「他のグループはどうなんだろう。」 「丁寧な文の書き方が分かってきたぞ！」 ↓	
第2次 ④ 応用するⅡ	「Sさんのお父さんに手紙を書いてみよう。」 ↓ 「グループのみんなはどのように書いているのかな？」 ↓ 「他のグループはどうなんだろう。」 「〇〇なんていう言葉を使うとより丁寧になるね。私たちも取り入れてみよう。」 ↓ 「初めの季節の言葉を入れているグループがあったよ。知らなかったなあ・・・」 ↓ 「できたぞ！投函しよう。」	目標：社長への手紙の内容を考える。 活動：②相手や場にふさわしい文章になるように文章を書く。（個別） ・グループ（4人）でよりよい表現方法になるように考える。 ①あるグループの書き直したものを自分たちのグループと比較し、さらによりよい表現方法をにるように考える。（本時） 自分たちの表現をもう一度見直す。 ①時候の挨拶などを取り入れ、改めて相手に対して失礼のない書き方で書き直してみる。

5 本時（第2次 3/4時間目）

（1）本時の目標

（社長さんに宛てて書いた手紙について）ある一つのグループの考えた手紙をもとに、自分のグループのものと比較したり、別のグループの表現方法を聞いたりすることを通して、さらにより手紙に仕上げていく。

（2）本時の展開

	学 習 活 動	指導上の留意点（◆評価）
ひびき合い	1 あるグループの手紙を読み、自分たちのものと比較し、よい言い回しや言葉の表現を見つける。 ・「お忙しいとは思いますが」と気を遣っている文がいます。 ・来校して欲しい理由を詳しく書いているところがいいです。 ・私たちは、場所を書いておいたので、加えたらよいと思います。 ・季節のあいさつの言葉を最初に入れた方がよいと思います。 ・“お”を入れた方がよいところがあります。	◆悪い点よりもよい点（丁寧な言葉や言い回しなど）を見つけることができる。（読） ◆表現の足りないところや誤りに気付き、加えている。（読） ◆文の構成も考慮して発言している。（読・話） *例にするグループのものを予め拡大しておき、黒板に貼っておく。児童の意見を加えていく。 *よい表記であっても、児童が気づかないようであれば

	す。	ば、教師が取り上げていく。
	どのような点がよいのか、理由をはっきりさせながら話していく。	。
再構築	2 できあがった手紙と始めにグループでまとめた手紙を見直し、足りなかったところや言葉の使い方について話し合う。 ・私たちのグループは、来校してほしい気持ちの文がちょっと少なかったです。	＊話し合いの様子を発言し、どのような点を改善しなければならなかったか、どこかのグループに発表してもらおう。 ◆内容を見直し、さらにより表現にしている。(読)

(3) 本時の視点

- 総合学習と絡めたこの単元は、児童の知的好奇心を高めるものであったか。
- 話し合いの持ち方は、ひびき合いが見られるものであったか。
- 2の場面の児童の話し合いでは、見直しができ、再構築へ結びつくものであったか。

6 実践を終えて

(1) 単元と児童

本単元は、お世話になった方（社長さん）へ、上手にお礼の手紙を書きたい、という思いから始まった。児童の実態として、正式な手紙の書き方に関して不安がある子や文章が苦手な子が多く、それらを克服したいと考えていることが分かった。そこで、丁寧で分かり易い言葉で、感じていることを理解してもらえりような文章の書き方を中心に学習していこうということで始まった。

児童にとって一番難しかったのは、一番子どもたちが難しかったのは、日頃の言葉遣いからみても、丁寧な言葉がどういう言葉なのか、またどのように使っているものなのかが分からずにいるために筆が進まなくなってしまうことであった。教科書の例文を参考に、一つずつ確認しながら知識として習得していった。そのため、計画していた時間より少し時間がかかってしまった。

その後、実際に手紙を書く練習をしていったのだが、自信がない児童を少しでも減らせるよう、グループで学習しながら、内容を検討していくことにした。はじめ→なか→むすび という順序を意識させて文章を書いていくことや、友達のよい表現を参考にしたり、取り入れたりできることを活動の目的にした。

(2) 本時の課題について

内容は、切実な問題であったと思っているのだが、指導方法に大きく2つの問題があったと思う。

①メッセージと手紙の区別が曖昧

本単元は、宇宙人から地球人へのメッセージ文を学習するものとなっている。「手紙」と「メッセージ」は、やはり根本的な部分で違うと思う。今回、用いたかったのは「手紙」であったので、言葉遣いの違いや思いを語る部分などを重視して書いていくことになる。丁寧語や分かり易い言葉を用いるところでは、共通部分であるが、手紙特有の思いを語る部分を大切にしていこうという点ではもの足りなく、本来の「手紙」を書くという点では、違ってくると反省している。

②一つの手紙にまとめる

本時では、相手に送る手紙をクラスでひとつにまとめようと考えた。まとめるというのは、一つの文章にしてしまうことである。本時では、児童の意見交換が活発に交わされなかった。それは、手紙には、個の思いが綴られるべきものであるため、誰かのものと一緒にしようとするのは、児童にとっては、やはり抵抗があったのではないと思う。どの文章にしても思いが様々なため、児童はどれを選んでよいかわからない。しかし、それは、当たり前のことである。どれも選ばれてよい文章である。グループやクラスでまとめること、話し合うことの根本的な意義がはっきりせずに活動をさせてしまった。

(3) 本時の変更点について

計画当初は、よい例となるような文章にまとめたグループのものをクラス全員への例示として出すつもりであったが、前時にまとめた各グループの内容を読んだ時、丁寧な言葉でなかったり、言い回しがはっきりしなかった文章があったため、その点を見つけさせながら、よい文章へと引き出せばよいと考えた。しかし、よい手紙とは、どのような言い回しや言葉遣いで書かれたものなのか、よく分からない児童にとって、評価していくのは難しく、また、替わりとなるものも出すことができなかった。そのため、最初の計画で行った方がよかったと考えている。

(4) 成果と課題

・成果

本単元でもそうであったが、友達の書いた文章を読むというのは、児童にとって大変興味深いことのようにある。その活動には、自分の書いた文章との比較が含まれている。自分には表現できなかった言い回しや

言葉があると“よいところ”として認めていた。今回の手紙にも同様のことが言えるのではないかと思う。授業の中では、誤字脱字や丁寧語になっていないところを見つけてあげるような活動も行ったが、できればそのような内容よりもお互いよいところを自分自身に取り入れるようにしていきたい。これが、“ひびき合って学ぶ”内容だと考えている。

また、時候の挨拶から結びといったようなかたちや正しく丁寧語を使っていくような手紙を書く経験があまりなかったように思う。学校からのお便り等で目にするお知らせには、時候の挨拶が書かれている。今まで、あまり気にしなかったようであるが、この学習を機に目を通す子も増えた。さらに、敬体と常体の文末があることやそれらをそろえて書くこと、丁寧語な言葉にする大切さなど、言葉にこだわりながら学習を進めていくことができたと思う。このように手紙の書き方を学んだことは、これからの生活にも十分役に立つと思われる。

・課 題

(1)の本時の課題にも述べたように、一人一人の思いをまとめてしまう、という点が何よりの課題だったのではないかと思う。お礼の手紙を送りたいが、文章に自信がない・・・といったところを少しでも解消できたらと思い、学習を計画した。そこで行ったグループ活動では、個々の文章を生かし、よりよい言い回しを見つけて欲しいと考えて行おうとしたが、目的が大まかすぎて、児童は、どうまとめてよいか分からずにいた。そこには、“よい手紙の文章”を経験したり、目にしたりする機会がなく、どこまでを目指して文章を作り上げていったらよいか分からなかったという、基礎になる部分が備わっていなかったことが原因であると考えている。児童の実態をふまえるとそれを補う内容が必要だったと思う。途中、指導計画を修正していく必要があった。

「ひびき合って学べただろうか？」と振り返ると、前述したように足りない部分がたくさんあったと思う。この学習を一度終え、もう一度相手を変えたり、お礼の手紙を書くことになったりした時に、基礎的なことが備わった児童が今回の学習の経験を生かし、よりよい文章を求めて、活発に話し合っていくことができるかもしれない。

「書く」という領域で、子どもたち同士が高まり合う授業というのは、とても難しいと感じている。しかし、個が主体となる内容ではあるが、同じ教室にいる者同士、お互い切磋琢磨しながら学び合えるよう、これからも教材分析をし、児童の実態に合わせた授業を展開していきたい。

(2)